２０２３／０５／０７　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　牧師

主　　題：和解をもたらすキリストの十字架②
聖書箇所：コロサイ人への手紙１章２１－２３節

テーマ：イエス・キリストの十字架が成し遂げた“和解”とは？

私たちは先週、コロサイ人への手紙１章２１－２３節を中心に、愛する主イエス・キリストの十字架、特にそれによってもたらされる和解について学びましたが、きょうは残りの部分２２節の後半から２３節を中心に考えてみたいと思います。まずは一度みことばをお読みしますので、それぞれよく神様のことばに耳を傾けてみてください。２１節からパウロはこのように記していました。

コロサイ１：２１－２３

「:21 あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行いの中にあったのですが、:22 今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。:23 ただし、あなたがたは、しっかりとした土台の上に堅く立って、すでに聞いた福音の望みからはずれることなく、信仰に踏みとどまらなければなりません。この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられているのであって、このパウロはそれに仕える者となったのです。」

かつて、イギリスの説教者トーマス・ワトソンは、キリストの十字架の犠牲について、次のように述べていました。「罪は私たちを神様から引き離しましたが、キリストの血は私たちを神様に堅く結びつけます。たとえ、私たちが天使のように多くの恵みを受けたとしても、私たちの和解を実現することはできなかったでしょう。たとえ、私たちが何百万の生け贄を捧げ、溢れる涙を流したとしても、怒れる神様をなだめることはできなかったでしょう。キリストの血だけが、私たちを神の恩寵へと導き、神様が笑顔で私たちを見てくださるようにするのです。」キリストの犠牲、これこそ私たちにはどうすることもできなかった問題を解決してくれた、唯一のものでした。その尊い血は、神様から遠く離れていた私たちを神様に堅く結びつけてくれた、私たちにとっての唯一の希望でした。

〇キリストの十字架が成し遂げた和解とは：

先週私たちは、そんなキリストの十字架がもたらしてくれた和解に関して、その内容やすばらしさを四つの要素に分けて考えました。前回はそのうちの二つを一緒に見ましたが、覚えておられますか？

１．和解の必要性　２１節

一つ目に見た要素は「和解の必要性」でした。まだキリストを知らなかった時に、救われる以前の私たちがみな和解を必要としていた罪人だ、ということをパウロは思い出させていました。私たちは、決して罪と関わりを持つことのできない聖く正しい神様から遠く引き離されていました。いや、ただ離されていただけではありません。私たちは心においても、行いにおいても、自らの意思でもって神様に逆らう敵として歩んでいました。そんな私たちの姿を見るときに、どう考えたとしても私たちはみな神様の御怒りのみを受けるにしか値しませんでした。この世界のすべてを造られた創造主に対して従うことを拒んでいるばかりか、この方の忌み嫌われることを私たちはみな喜んで行っていたのです。造られたものが造ったものに感謝をささげることもなければ、ましてや創り主に取り替えて、造られたものを、いや、何より自分自身を一番に愛し続けていました。間違いなくすべての罪人が聖なる神様の前に滅ぼされてしかるべきそんな存在でした。しかし感謝なことにそんな状況に対する解決策を神様が与えてくださいました。頑なで遠く離れていた敵である者たちのために、ただ神様がみずから進んで愛を示してくださり、ご自身のひとり子であるイエス・キリストを世に送ってくださったのです。

２．和解の手段　２２ａ節

その御子こそが、二つ目の要素「和解の手段」でした。御子の十字架こそが、神様と人との間に和解をもたらすことのできた唯一の手段、唯一の方法だったのです。本来なら私たちこそが、神様の御怒りを受けるべき存在でした。神様に逆らって生きていた私たちこそが、正しいさばきを受けて永遠に苦しんで当然の存在でした。しかし、一切罪のないイエス・キリストが私たちに代わって十字架にかかってくださり、その血を流してくださいました。私たちが受けるべきその罪の罰を、人として来てくださった創り主が代わりに背負って、この方が罪に対する神様の御怒りを耐え忍んでくださったのです。罪に燃え上がっているその怒りの杯は、当然私たちひとりひとりの上に注がれるべきものでした。しかしそれを、永遠の神であるキリストが十字架の上で代わりに飲み、その怒りをなだめてくださったのです。一切の罪もない、完全でいつも正しい神の御子が、すべての権利や力を持っておられる栄光に輝く王であるお方が、十字架の上で死んでくださいました。こうしてただ神様の一方的な愛とあわれみによって、この方を信じる私たちは神の怒りから救われたのです。イエス・キリストは、私たちにとってすべてでした。この方がいなければ、私たちには何の希望もありませんでした。この方の十字架が和解をもたらしてくれたのです。そんなキリストの十字架にある和解について、私たちはもう二つ見ました。続けて、そのすばらしさに関して三つ目のことをパウロのことばから一緒に見てみましょう。

３．和解の目的　２２ｂ節

三つ目の要素は「和解の目的」です。もう一度２２節、特に後半部分に注目しながらよく見てください。このように記されていました。「**今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。**」キリストの十字架は、確かに遠く離れて敵として歩んでいた私たちと神様との間に和解というものをもたらしてくれました。私たちにはどうすることもできなかった罪によって壊れた関係を、身代わりの死が修復してくれました。あまりにもすばらしいことが御子を通して成し遂げられたのです。でも驚くべきなのは、それがすべてではなかったということです。皆さん、十字架のみわざにはさらに偉大な目的がありました。大きな狙いが、ゴールがありました。はっきりと書かれていましたね。「それは私たちを聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせるためでした。」と。聖く正しい神様の前に、聖い者として立たせるということ、それが目的だったのです。ここで「**立たせてくださる**」と訳されていることばは、法律用語としても用いられたりして、「ある人を法廷に連れて行く」とか「裁判官の前に立たせる」といった意味が含まれています。たぶんこれを聞けば想像しやすいかと思いますが、たとえばローマに向かっていたパウロを励ました御使いのことばの中にも、同じことばがこのように使われていました。使徒２７：２４に「**恐れてはいけません。パウロ。あなたは必ずカイザルの前に立ちます。…**」と。こうして「パウロはカイザルの前に立つ」と言われていました。しかし、御子の十字架は、聖なる神様の御前にその人を立たせてくださる、と言うのです。しかもただ立たせるのではありません。そんな者を「**聖く、傷なく、非難されるところのない者として**」立たせてくださるのだと言うわけです。

さてここで少し立ち止まって、三つのことばが何を意味しているのかを、よく考えてみてください。

１）“聖く”・・まず「**聖く**」とありました。「**聖く**」ということばには「何かから一線を画している」とか「聖別されている」といった意味があります。つまり、かつては罪に堕落していたような者が、ただ御子の十字架によって罪から離された、罪とは交わりを持たない聖い者として御前に立つことができる、というのです。

２）“傷なく”・・次に「**傷なく**」とありました。このことばには、汚れやシミ、傷がないといった意味があります。振り返ってみれば旧約の時代、神殿でささげられる神様へのいけにえなどは、いつも傷のないものであることが求められていました。たとえばレビ記２２章の中にはこのように記されています。レビ記２２：２０，２２に、「**:20 欠陥のあるものは、いっさいささげてはならない。それはあなたがた**

のために受け入れられないからである。:22 盲目のもの、折れたところのあるもの、傷のあるもの、あるいは、うみの出るもの、湿疹のあるもの、かさぶたのあるもの、あなたがたはこれらのものを【主】にささげてはならない。また、これらのものを【主】への火によるささげ物として祭壇の上にささげてはならない。」と。一切の汚れのない聖い神様の前には、どんなに小さな汚れでさえも許されませんでした。しかし、ただ御子の十字架によってのみ、かつて罪に汚染されていた者が傷のない者として御前に立つことができる、というのです。

３）“非難されるところのない”・・最後に「**非難されるところのない者**」とありました。「非難されるところがない」ということばには「非難の余地がない」とか「責められる点がない」といった意味があります。非難される余地がない、だれかから責められるような点がないと。つまり、ただ汚れとか傷がないだけではありません。潔白であるからこそ、だれからも指をさされて非難されたり、訴えられるようなことがないということです。だれからもというのは文字通り、だれからもです。聖書はサタンのことを告発者として描いていたりもします。黙示録を見てみると１２：１０にはこのように表されています。「**…私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者…**」そのことば通り、神様を忌み嫌っているサタンは、今も変わらずに神の御前で、日々聖徒たちのことを訴え続けているのです。でも、そんなサタンが「有罪だ！」と訴えたとしても、神様が「無実だ！」と弁護してくださるというのです。ローマ８：３３にこう記されていました。「**神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。**」ほかのだれでもない神が義と認めてくださるのです。ただ御子の十字架によって和解された者は、たとえサタンの激しい非難があったとしても、神様によって正しいと認められた者として、神様によって義と宣言された者として御前に立つことができる、というわけです。凄いことだと思いませんか？これがイエス・キリストの十字架が成し遂げてくださったみわざでした。

もう少しよく考えてみてください。本来であれば、罪深い私たちはだれも聖い神様の御前に立つことなど絶対にできませんでした。前回も見ましたが、ハバクク書にははっきりとこう書かかれていたのです。ハバクク１：１２－１３「**【主】よ。あなたは昔から、私の神、私の聖なる方ではありませんか。…あなたの目はあまりきよくて、悪を見ず、労苦に目を留めることができないのでしょう。**」と。「聖なる神様のその目は、あまりにもきよすぎて、どんな悪も見ることはできません。」と。罪とは一切交わることのないきよく正しい神様の目は、少しの悪でさえ見ることはできませんでした。光である神様が闇と交わることなど到底あり得なかったのです。ですから皆さん、完全なお方の前に出るためには完全な者でなくてはいけませんでした。聖いお方の前に立とうとするのであれば、その者も聖くなくてはいけませんでした。義なる神様の御前に受け入れられるために必要なのは、ただ罪の赦しだけ、ではありません。それだけではなくて、完全な義が必要だったのです。神様の御前に出るためには、私たちは完全でなくてはいけませんでした。そのような義が必要だったのです。正しい者でなくては出られませんでした。もちろん、そんな義は私たちのうちにはどこにもありませんでした。でもそれを唯一与えることのできるものがありました。それこそが、イエス・キリストの十字架だったのです。御子の死が和解をもたらし、この方を信じ受け入れるすべての者を、完全で、正しく、義なる者として御前に立たせてくださったのです。

でも、ある人はこのように聞いてきて少し不思議に思っているかもしれません。このように考えている人もおられるかもしれません。――私は自分のことをよくわかっています。日々の生活を振り返ってみれば、到底自分が正しい者だなどとは思えません。主を信じた後でさえも、何度も何度も罪を犯してしまいます。自分なんか全く聖くなどありません。確かにその通りです。悲しいことに、救われた後も、私たちは神様の忌み嫌われている罪を犯してしまうことがあります。ましてや、周りの人々から責められるような過ちを犯してしまうことさえあります。でも皆さん、ここでのポイントは、そんな弱さを覚える者でさえ、神様の目には、聖く、傷なく、非難されるところのない者として写っているという

ことです。キリストのうちにある者は、もうすでに神様の目の前には聖く、傷なく、非難されるところのない者として写っているということです。もちろんこれは、神様が罪を見て見ぬふりをしたからではありません。神様が真理をねじ曲げて、妥協して、悪を正しいと認めたからではありません。そうではなく、ただキリストの十字架のゆえに、神様は私たちのことを義なる者として認めてくださるのです。

そうだとすれば、いったいあの十字架の上で何が起こったのでしょう？いったいそこで何が成し遂げられたのでしょう？そのことをパウロはわかりやすく別の箇所で教えてくれていました。これはとても大切な箇所なので、聖書を持っておられる方はⅡコリント５：２１を開いてください。このように記されていました。「**神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。**」これが、あの十字架の上で成し遂げられたみわざでした。父なる神様はまず、罪を知らないお方、イエス・キリストを私たちの代わりに罪とされました。でも、絶対に間違ってはいけないのは、罪人となったのではありません。「**罪とされました。**」完全な人であって、完全な神様であるお方が罪を犯すことなどいうことは決してありえないことでした。この方はただ私たちの代わりに罪となられたのです。罪の全くないその御子が、まるであらゆる罪を犯した者のように扱われました。この方が私たちの罪を背負って、私たちの身代わりとなって苦しみ死なれました。本来なら私たちひとりひとりが受けるべきその罪に対する罰を、その罪に対する御怒りをこの方が代わりに受けてくださったのです。イザヤ５３：５－６にはこう書いてあります。「**:5 しかし、彼は、私たちの背きの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分勝手な道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。**」またⅠペテロ２：２２－２４でもはっきりと教えてくれていました。「**:22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。:24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。**」と。私たちの罪をこの方が負ってくださいました。こうしてキリストは、私たちにはどうすることもできなかったその罪を背負って、私たちの代わりに罰を受けてくださいました。ほかのだれでもない主ご自身が、罪の代価をすべて支払ってくださったのです。

でもこれがすべてではありませんでした。もう一度Ⅱコリント５：２１に戻ってみると、このように続きが書いてありました。「**それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。**」と。言い換えれば、今度は、罪の全くない完全な生涯を送られた方のその義が、恵みによって与えられる、ということです。これが皆さん、すばらしい交換でした。少し思い浮かべてみてください。確かに私たちは罪深い者です。しかしそんな私たちの罪のすべてを、御子が代わりに十字架で背負って罰を受けてくださいました。その逆に、御子は聖く完全なお方でした。その完全な義を、私たちに代わりに与えてくださったのです。私たちがかつて着ていた罪に汚れた衣服ではなくて、純白の義の衣服を着せてくださいました。だからこそ、キリストのうちにある私たちを聖い神様が見るときに、そこに、聖く、傷なく、非難されるところのないその姿を見出すことができるというわけです。私たちが自分の力や行いによって達成した結果では決してありません。私たちのうちにそれに値するような何か良いものがあったのでもありません。十字架の死が、すべてのことを成し遂げてくれました。私たちが何かをしたのではありません。ただイエス・キリストのその和解のみわざのゆえに、私たちの罪は赦され、同時に私たちは義とされて、御前に立つことができるようになったのです。キリストにあって義と認められて、神様との平和を持っている者として歩んでいくことができるというわけです。私たちがしたことはありません。それが、キリストが十字架の上で成し遂げてくださったことでした。

そうだとすれば、この事実は私たちの心に大きな喜びや慰め、平安をもたらさないでしょうか？そして、こんなにもすばらしいみわざを目の当たりにしている私たちは、果たしてそれにふさわしい歩みを

しているでしょうか？すでに罪を赦された者として、確かに罪との戦いを日々経験しながらもキリストに似た者に成長していきたいと、そのように歩んでいるでしょうか？十字架で成し遂げられたそのすばらしい和解のみわざをますます感謝して、これがなかったら自分は何もなかったのだと喜びながら、聖くされた者としてますます聖さを追い求めているでしょうか？もしかしたら皆さんの中に、その歩みをしたいと願っていながらも、自分の過去の罪や罪悪感といったものに打ちのめされてしまっている人がいるかもしれません。過去に犯してしまった過ちによって心に悩みや恐れや不安を覚えている人もいるかもしれません。そんな方がおられるなら、よくきょうのみことばを覚えてください。もし、あなたがキリストのうちにあるのなら、いつまでも過去の罪や恥によって、自分を責め続ける必要はありません。どんなに酷い罪を犯していたとしても、これまでにどんなに酷い歩みをしてきたとしても、そうです。あなたにとってあまりにも大きくて深刻に思えてしまうようなものも同じです。いつまでもそれらによって自分のことを責め続ける必要はありません。なぜなら、キリストはそんな罪のためにも死なれたからです。この方の死にあって、主を信じる者はみな、主の前にもうすでに義とされたのです。私たちが自分を義としたのではありません。主を信じる者を主が義としてくださいました。でも私たちは時に罪悪感に心を奪われたり、神様の前に正しいことを選択することよりも聖書や祈りを逆に遠ざけてしまい、兄弟姉妹との交わりも拒んで自分自身のことを責め続けることがあるかもしれません。責め続ける自分に満足しているのかもしれません。でもそんなときは、覚えることです。キリストの恵みは自分には十分なのだと。ただキリストのうちにあるその義が自分には十分なのだと。忘れてはいけません。私たちが義とされたのは、私たちが頑張って良い行いをしたからではありません。イエス・キリストが私たちの身代わりとなって十字架にかかって死なれ、信じる者すべての罪を赦してくださり、義なる者としてくださったのです。私たちが何かをしたのではありません。すべてキリストのみわざでした。ほかのだれでもないあわれみ深い神様が、キリストにあって「聖い」と宣言してくださるのです。ローマ８：１にもこのように書いてあります。「**こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。**」「**キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。**」それが、私たちが持っている喜びです。それが、私たちが持っている希望です。私たちの罪はキリストにあって赦されているのだと。もちろん勘違いして欲しくないのは、聖く正しい神様は、変わらずにどんな罪をも憎んでおられます。だからこそ、私たちが日々の生活の中で罪を犯せば、正直にそれを告白して悔い改めながら歩んでいくことです。神様の赦しを求めながら、主の聖徒として、すでに義とされたことの喜びを心から感謝しながら歩んでいくことです。主に赦された者としてその赦しを感謝しながら、しかし、その赦しを与えてくださった神様をますます喜ばせる者として生きていきたいとそのように願って歩んでいくことです。私たちの罪はキリストにあって赦されているということ、その真理を忘れないことです。聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださる――これが、キリストの十字架がもたらした和解の目的でした。

４．和解のもたらす責任　２３節

そして最後四つ目の要素として述べられていたのは「和解のもたらす責任」でした。もう一度コロサイに戻って、コロサイ１：２３にこう書いています。「**ただし、あなたがたは、しっかりとした土台の上に堅く立って、すでに聞いた福音の望みからはずれることなく、信仰に踏みとどまらなければなりません。この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられているのであって、このパウロはそれに仕える者となったのです。**」この箇所をさっと読めば、パウロがコロサイの信仰者たちのことを疑っているかのように聞こえたかもしれません。「**ただし、あなたがたは、…信仰に踏みとどまらなければなりません。**」などと言えば、まるでコロサイの兄弟姉妹たちがそのような行動をとっていないかのようで、そのことをパウロが心配しているかのように思えたかもしれません。またある人は、パウロがここに来て急に「救いは自分たちの行いが必要です」と求めているかのように聞こえたかもしれません。なぜなら、今までと違って

２３節では「**あなたがたは信仰に踏みとどまらなければなりません。**」と言うからです。先ほどまでは「和解はただキリストの十字架のみわざにのみよる」と述べていながら、結局はまず自分たちが何かをしなければならないと教えようとしていたのでしょうか？

ここでパウロが言わんとしていたことは、もちろんそうではありません。いや、むしろ私たちがこれまでにも学んできたように、パウロはコロサイの信仰者たちについて、彼らが主に喜ばれる歩みをしているということを何度も神様に感謝していました。彼らの救いを疑っていたわけではなかったのです。また言うまでもなくパウロは、救いには自分たちの行いが必要だなどという教えをしていたのではありませんでした。ではいったい、どうしてパウロは彼らに対して「信仰に踏みとどまらなければならない」と改めて求めていたのでしょう？それは、キリストによって和解し、本当に救われた者たちには、それに伴う責任がある、ということを明らかにするためでした。確かに私たちはただ神様を信じる信仰によって、恵みによって救われたのであって、自分の何かしらの行いやわざというものを十二分にしたから神様の前に義と認められるのではありません。でも同時に、本当に救われたのなら、その者は最初に抱いた信仰を途中で捨てることはなく、最後まで保ち続けることが求められるのです。その歩みが、その信仰が純粋なものであるということを証ししてくれるのだと、人々に思い出させていたのです。ポイントはこういうことです。信仰に踏みとどまることが救いをもたらすわけではありません。でも、真に救われているのであれば、その人は信仰に踏みとどまり続けようとするということです。逆を言うと、たとえ外側だけキリストへの信仰を告白し、教会のメンバーになったり、聖書や祈りに対して熱心であったとしても、本当にキリストを知らなければ、その人のうちに本当の信仰がないのなら、その心は次第に神様や福音から離れていってしまいます。イエス様も種蒔きのたとえ話の中でそのことを教えていました。ルカ８：１３にこのように記されています。「**岩の上に落ちるとは、こういう人たちのことです。聞いたときには喜んでみことばを受け入れるが、根がないので、しばらくは信じていても、試練のときになると、身を引いてしまうのです。**」と。最初に聞いたときは「神様すばらしい！」と喜ぶのです。でも根がないので、時が経てば、試練が来れば身を引いてしまうのだと。Ｉヨハネ２：１９にも「**彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であったのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなったのは、彼らがみな私たちの仲間でなかったことが明らかにされるためなのです。**」出て行った者たちがいました。でも、出て行った者たちはもともと仲間であって出て行ったのではありません。もとから仲間ではなかった、もとから救われていなかったということです。もしかしたら、そのような傾向はすぐに現れないかもしれません。何十年もの間、表面上はクリスチャンのようにふるまっていることがあるかもしれません。でも次第に自分の心の中で神様を愛することよりも、この世の楽しみに心が奪われるようになっていくのです。みことばが教えていることよりも、罪を愛するようになっていくのです。もちろん救われている者がその救いを失うことは絶対にありません。そんなことを聖書は全く教えていません。むしろ、救いというのは最初から最後まで神様のみわざであって、その神様が守っていてくださるからこそ、真に救われた者がその救いを失うこと、途中でそれを失うことは決してないとそう確信することができます。ピリピ１：６にもこう書いていました。「**あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。**」と。初めてくださった方が、完成させてくださると。始めたのは私たちではありません。神様にゆだねて神様の守りに確信して歩んでいくことができるのです。でももし、その信仰が最初から本物でないなら、その人は時が経てば生ける神様から離れていってしまうのです。からだがそこにあったとしても、心が離れていってしまうのです。そしてもし私たちが、自分は救われているとただ思い込んでいるだけなら、その最後は、ことばでは言い表せないほどの悲劇でしかありません。だからこそ、パウロは繰り返し自分の信仰を吟味することも教えていまし

た。またパウロは、信仰に踏みとどまり続けることを兄弟たちに求めていたのです。完成させてくださるその神様の助けに拠り頼みながら、堅く立ち続けることが大切だったのです。

またパウロはそのようにして信仰に踏みとどまることに関して、二つのことばをここで用いて、描いていました。もう一度２３節を見ていただくとこのようなことばが出てきます。まず一つ目に「**ただし、あなたがたは、しっかりとした土台の上に堅く立って**」とありました。「**堅く立**」つということばには「強固な土台を築く」とか「基盤を据える」といった意味が含まれています。これと同じことばが、皆さんもよくご存じの山上の説教の最後の箇所、砂の上と岩の上に家を建てた人のその教えの中でも出てきました。マタイ７：２５にこう書いています。「**雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。**」この場面は容易に想像ができますね。洪水が押し寄せてきたとしても、風がどれほど強く吹いてきたとしても、しっかりとした土台の上に据えられた家であれば、倒れませんでした。それと同じように、信仰者もいろいろな間違った教えの風などが吹き荒れようとも、聖書の教えに堅く立ち、そこに揺るがない強固な土台を築くということがその歩みにおいて欠かせないのです。強固な土台の上に立っていることは、欠かせないことでした。でも二つ目にこう書いています。「**すでに聞いた福音の望みからはずれることなく**」と。この「**はずれる**」ということばには「ずれてしまう」とか「変わってしまう」「変わる」といった意味が含まれています。あるべきところからずれてしまうのです。変わってしまうのです。すでに聞いた福音の望みから、ずれてしまうことのないようにと。パウロは、世界中に宣べ伝えられていてコロサイの兄弟姉妹のもとにも届いたその福音、彼らが聞いて信じたその福音、その希望以外のどんなものにも心を奪われることがないように、その福音から絶対にずれて行くことがないようにと、そう訴えていました。でもこれは背景を知っている私たちにとっては、なぜそれを言わないといけなかったかがよくわかると思います。教会の中にはいろんなにせ教師が入り込んでいたのです。彼らが間違った教えを伝えていました。でもそんな中にあっても間違った教えや考え、またそういった人々の習慣や自分自身、どういったものであろうとも、福音からみずからを引き離すようなものから身を避けるということ、そんなところにずれて行かないということは歩みにおいて欠かせないことでした。立つところに、立っていなさい、立ち続けていなさいと。彼らにとって、いやすべての信仰者にとって、救われる前も救われた後も、キリストにあるその福音に立ち続けることが必要だったわけです。信仰者もいろんなところで苦しみを覚えます。罪や誘惑との葛藤を経験して、不信仰な心との戦いを味わったりもします。主ために生きていくということには大きな犠牲を伴うこともあり、それに難しさを覚えてしまうこともあります。でもどんな困難があったとしても、本当にキリストを知っている者は、必ず最後にはいつも神様に立ち返って、神様の助けを祈り求めながら堅く立ち続けていこうとするのです。キリストの十字架にある希望を覚えて、私たちのためにご自身のいのちを犠牲にしてくださったその方の栄光を現していきたいと歩み続けていくのです。それこそが、キリストの十字架がもたらす和解の責任でした。

さて最後に、これまで私たちは四つの要素というものを見てきましたが、そこからいったい何が言えるでしょう？もちろんいろんなことが言えます。今の私たちにとって、キリストの和解というものは、数え切れないほどのすばらしい喜びや希望をもたらしてくれるものでした。では、このキリストにある和解に対して、それぞれはどのようにして応答するでしょう？

もし、まだ今この中にイエス・キリストを自分の救い主として信じていない方がおられるなら、未だに神様と一度も和解したことがなくて、今なお遠く離れ、神様に逆らう敵として歩んでいる方がおられるなら、どうか今、和解してください。帰ってからではなく今、和解してください。私たちには明日があるのかわかりません。次の瞬間があるのかもわかりません。でもその状態であるならどこに行くのかは知っています。そのままであるなら永遠の滅びにしか行きません。でも、きょうというこの日、私やあなたのような罪人のためにご自分のいのちを十字架でささげてくださったその恵み深い方の恵みを求

めることができます。まだ救いがあります。だからこの方の前に自分の罪深さを認めて、心から悔い改めて、主イエス・キリストを自分の救い主として、また主として信じ受け入れてください。このキリストのうちにのみ唯一救いがあります。この方のうちにのみ唯一いのちがあります。どうか、きょうというこの日に、この主にすべてをゆだねる本当の喜びを知ってください。

またもうすでに主を愛しておられる皆さん、十字架の和解に対して私たちができる一つの応答を、パウロは私たちに教えてくれていました。先ほど見たⅡコリント５章にこんなことばが記されています。よく皆さんに見ていただきたいので、ぜひご自身の聖書で見てください。Ⅱコリントの５：１７－２０にこう書いていました。「**17 だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。:18 これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。:19 すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。:20 こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。**」と。よく自分自身のこととして考えてください。みことばははっきりと教えていました。だれであれイエス・キリストを救い主として、主として信じている者はみな、今キリストの使節となりました。今神様から和解の務めを、神様から和解のことばをゆだねられたキリストを宣べ伝える使者です。私たちはみなそのように変えられました。思い返せばかつて神様の敵として遠く離れ罪に死んでいた時、私たちには一切希望はありませんでした。ただ自分の愚かさとその罪のゆえに、聖く正しい神様によってさばかれて当然の存在でした。私たちにふさわしい神様の御怒りを受けて、永遠の滅びで苦しむことのみが値する、そんな存在でした。しかしそんな私たちに、ほかのだれでもない神様が愛を示してくださり、キリストの十字架によって和解をもたらしてくださったのです。その死によって罪が赦され、義とされました。私たちにはどうすることもできなかったその問題を、こうして神様が解決してくださったのです。そして、そんな私たちを救ってくださった神様が私たちに和解の務めを与えてくださったのなら、あなたにその務めを与えてくださったのなら、果たしてあなたは今、どのようにそれに応答しているでしょう？もし私は和解の使節なんかになりたくないと思うのなら、自分の信仰をよく吟味することです。和解された者は、和解の使者として変えられました。でも考えてみてください。和解を与えられたこと自体がすばらしいことなのに、今度はその和解のことばを私たちが宣べ伝える者として神様が用いてくださるのです。では、あなたはどれほど熱心に「**神の和解を受け入れなさい**」とキリストに代わって人々に訴えているでしょう？「**ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。…あなたがたに願います。**」と書いてありました。どれだけ私たちはキリストの代わりに使節として、私たちの愛する和解をもたらしたキリストを、大胆に宣べ伝えているでしょう？確かに私たちは成長しなければならないところがたくさんあります。弱さもあります。でも、だからこそ覚えることです。キリストの和解が、あのキリストの十字架がどんなものをもたらしてくれたのかを、どんなに凄いことを成し遂げてくださったのかを思い出すことです。キリストの十字架の和解がなければ、私たちは何もありませんでした。でも今、このキリストの十字架にあって私たちはすべてを持っているのです。そのすばらしさを知ったなら、そのすばらしさを伝えていくことです。トーマス・ワトソンは言っていました。

「たとえ私たちが何百万もの生贄を捧げ、溢れる涙を流したとしても、怒れる神様をなだめることはできなかったでしょう。キリストの血だけが私たちを神の恩寵へと導き、神様が笑顔で私たちを見てくださるようにするのです。」キリストの血だけがそれを成し遂げてくださいました。私たちを救ってくださったその神様に、御子の十字架に心から感謝しながら、このすばらしい知らせを、私たちもともに喜んで宣べ伝えていきましょう。